

英文校閲の実際 第22話【最終回】

——まとめ：英米圏で通用する英文最終報告書を書くために

「英文校閲の実際」と題する本シリーズでは、日本人 SD（初心者）が書いた毒性試験の英文最終報告書案を米国人の毒性試験専門家が校閲した際に指摘された誤りを紹介しました。シリーズを終えるにあたり、誤りのない英文を書くための具体的な方法を以下の7項目にまとめました。

1. 英文最終報告書案は英語話者の専門家の校閲を受けたほうが良い。

日本人の英語下手は海外でも知られています¹⁾。原因は単なる勉強不足であるという語学専門家もいますが、それは違います。例えば日本語話者は連続した子音を聞き分ける能力が欧米語話者よりも明らかに劣りますが、この差は国籍とは無関係に、出生後の環境が日本語環境の場合に、子音の連続がない日本語の処理に脳が特化することが原因で生じること、及びこの差は生後 14 カ月までに確立することが国際共同研究により分かっているからです¹⁾。この他に日本語と英語の根本的な違いが影響し、日本語話者が書いた英文には自分では気づかない日本語話者特有の誤りが多いのが普通です。したがって日本人が書いた英文最終報告書や英語論文は通常、英語話者による校閲が必要です。しかも初心者の SD が書いた英文最終報告書案は、可能ならば英語話者による校閲を受ける前に、ある程度英語力のある先輩等による予備校閲を受けることを勧めます。理由は SD が書いた英文のレベルがあまりにも低いと、英語話者の校閲者が内容を誤解して、SD の意図とは別の意味の英文に修正してしまうことがあるからです（誤解の実例は第1話文例1を参照）。

2. 英文最終報告書は和文最終報告書を翻訳して作成してはならない。

初心者の SD が書いた英文最終報告書に最も多い誤りは数の誤りです。その原因の1つは、SD が和文最終報告書を翻訳して英文最終報告書を作成することにあると思われます。日本語には一般的な複数形がないため、殆どの名詞はその実際の数とは無関係に単数形で書かれています。経験不足の SD は単数形の名詞をそのまま単数形の英語に翻訳するので、無数の数の誤りが生じます。したがって英文最終報告書を作成するときは、最初から英語で文章を考えて書く必要があります。

会社によっては、既に自動翻訳ソフトや生成 AI を使用して英文最終報告書を作成しているかもしれません。自動翻訳ソフトの性能は今や英文和訳なら殆ど完璧なレベルに達しています。しかし和文英訳の性能はまだ完璧とは言えません。その理由は、英語の観点から見て、日本語は論理的でない文章が多いからです^{1, 2)}。その代表が数です。上述のように日本語の名詞はほとんど全て単数形で書かれているので、自動翻訳ソフトは、それらが本当の単数か、一般的複数形がないための「偽りの単数形」かを、いちいち判定して翻訳する必要があります。現在の翻訳ソフトでも前後関係から論理的に判定できる場合は単数形の名詞を複数形に翻訳する能力を備えています。前後関係から判定できない場合は間違えます。また、日本語には特有な論理的曖昧さや省略が多く含まれます。自動翻訳ソフトがこれらの日本語の本質的な欠陥を全て補って完璧な英文に翻訳してくれると思うのは時期尚早です。会社の方針で自動翻訳ソフトを使わざるを得ない場合は、自動翻訳された英文最終報告案を下訳と考え、SD による内容の確認や英語話者による校閲が必須と考えられます。

3. 英文を書くときは、日本語以上に厳密な論理性が必要とされる。

英語話者による指摘が数の誤りの次に多かったのは、冠詞の誤りでした。冠詞も英語の論理を厳密にするための、日本語にはない仕組みです。日本人が英文を書くとき、冠詞と数に関する誤りには特に意識的に注意する必要があります。具体的には英文を書くときは先ず扱っている概念が単数

か複数かを意識し、単数なら前に不定冠詞を付け、名詞に限定や総称の意味がある場合には定冠詞を付けます。また、述語が離れていても忘れずに数を主語の数と一致させます。冠詞と数と数の一致は英文を書くときだけでなく、書き終わってから改めて意識的に再確認する必要があります（主語の数が分からない場合の具体的な確認方法は第 14 話文例 32 及び文例 33 を参照）。

4. 比較、例示、並置の場合は同格性の要求を常に意識すること。

英語の論理を厳密にするための仕組みの 1 つに、比較、例示、並置の際の同格性の要求があります。比較の場合は比較するものと比較されるもの両方の品詞や数を厳密に揃える必要があります。例えば投薬群のある臓器の平均重量を対照群のそれと比較する場合、日本語では大抵の場合、後の代名詞の「それ」を省きます。しかし英文では後の代名詞が省略された非論理的英文は許されません。例示や並置の場合も同様で、例示や並置される名詞の品詞や数や性質を厳密に同格に揃えます（例示の同格性の誤りの例は第 5 話文例 10 を、並置の同格性の誤りの例は第 8 話文例 17 を参照）。

5. 主語は明確に、また、可能な限り短くすること。

文章の論理を明確にするための第 1 歩は、主語を明確にすることです。そのためにはまず、主語に代名詞を使わないことです。また、主語をできるだけ短くして、主語と述語の間の距離を短くする必要があります。主語が長すぎる英文は、それだけで悪文です^{1) 2)}。（主語に代名詞を使ったための失敗例は第 1 話の文例 1 を、主語が長すぎる悪文の実例は第 8 話文例 18 を参照）。

6. 英文を書くときは可能な限り易しい表現を心がけること、また曖昧な表現を避けること。

日本人が英文を書くとき、難解な単語や言い回しを好んで用いる傾向があります^{1) 2)}。英文を書く場合は、欧米人専門家を見習って、できるだけ易しく、明快に書くようにします。また、同じ内容を表現するために複数の文章がある場合は、最も語数が少ない英文を選びます³⁾（不必要に難解な文章の実例は第 18 話文例 41 を、曖昧な文章の実例は第 5 話文例 10 や第 20 話文例 45 を参照）。

7. 自分が書いた英文が英語圏で実際に通用するかどうかは検索で判定できる。

英文を書いているとき、あるいは校閲者によって指摘された内容が納得できないときなど、自分が書いた英文が正しい（＝英語圏で通用する）かどうかを知りたいと思うことはよくあるはずです。Google USA (https://www.google.com/?gl=us&hl=en&gws_rd=cr&pws=0) の検索をうまく使えば、自分で書いた英文が正しいかどうかを判定することができます。ただし検索には若干の技術と慣れが必要です。検索したフレーズのヒット数が数万以上あれば安心してその英文が世間に通用すると判定できます。ヒット数がゼロに近ければそのフレーズは世間に通用しないと判定されます。ただし、構文が正しくても、検索したフレーズが長すぎる場合や、特殊な名詞や形容詞が含まれていると、ヒット数が激減します。ヒット数を増やすコツは、①検索に用いる英文フレーズを可能な限り短縮する、②ヒット数を減らす作用を持つ名詞や形容詞を省くか、半角のアスタリスク“*”に置き換えた「ワイルドカード検索」に切り替えることです。「ワイルドカード検索」をうまく使えばヒット数が劇的に増えます。（通常のフレーズ検索の実例は第 13 話文例 29 や第 17 話文例 40 を、また、ワイルドカード検索の実例は第 3 話文例 5 や第 19 話文例 43 を参照）。（終わり）

（馬屋原 宏）

引用文献

- 1) 馬屋原 宏：『日本人と英語—誰も書かなかった真実—』、薬事日報社（2016）
- 2) 馬屋原 宏：『誰でも書ける英文最終報告書・英語論文』、薬事日報社（2008）
- 3) Nohynek, G. J.: Presenting Toxicology Results, Taylor & Francis Ltd., London (1996)